

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [21]

ブルガータ訳聖書『第2マカベア書』より — 不定法未来形 —

秋山学

今月はブルガータ訳聖書の『第2マカベア書』からテキストを選んでみましょう。この書は、わが国の『新共同訳聖書』では『第1マカベア書』などの書とともに、「旧約聖書続編」すなわち旧約聖書と新約聖書の間に収められる一群の書に属しています。ただヒエロニムスによる「ブルガータ訳」では、旧約預言書の『マラキ書』の後、新約聖書の直前に収められています。一方、たとえば仏訳を参照する『エルサレム聖書』では、歴史書の一つとして『エステル記』と『ヨブ記』の間に収められています。

原文 Sed ad haec cum adulēscēns nēquāquam intenderet, vocāvit rēx mātrem et suādēbat eī, ut adulēscētī fieret suāsor in salūtem. Cum autem multīs eam verbis esset hortātus, prōmīsīt suāsūram sē filiō. Itaque inclināta ad illum, irrīdēns crūdēlem tyrannum sīc āit patriā vōce : « Fīli, miserēre meī, quae tē in uterō novem mēnsibus portāvi et lac trienniō dedī et aluī et in aetātem istam perdūxī et nūtrīcem mē tibi exhibuī. Petō, nāte, ut aspiciās ad caelum et terram et quae in ipsīs sunt, ūniversa vidēns intellegās quia nōn ex hīs, quae erant, fēcīt illa Deus ; et hominum genus ita fit. Nē timeās carnīficem istum, sed dignus frātribus tuīs effectus suscipe mortem, ut in illā miserātiōne cum frātribus tuīs tē recipiam ». — *Liber Secundus Maccabaeorum* 7, 25-29

仏訳 Le jeune homme ne prêtant à cela aucune attention, le roi fit approcher la mère et l'engagea à donner à l'adolescent des conseils pour sauver sa vie. Lorsqu'il l'eut longuement exhortée, elle consentit à persuader son fils. Elle se pencha donc vers lui et, mystifiant le tyran cruel, elle s'exprima de la sorte dans la langue de ses pères : « Mon fils, aie pitié de moi qui t'ai porté neuf mois dans mon sein, qui t'ait allaité trois ans, qui t'ai nourri et élevé jusqu'à l'âge où tu es (et pourvu à ton entretien). Je t'en conjure, mon enfant, regarde le ciel et la terre et vois tout ce qui est en eux, et sache que Dieu les a faits de rien et que la race des hommes est faite de la même manière. Ne crains pas ce bourreau, mais, te montrant digne de tes frères, accepte la

mort, afin que je te retrouve avec eux dans la miséricorde. »

訳 だが若者が、これらの事どもにまったく注意を向けないので、王はその母を呼び、若者にとって救いのための勧告者となるよう説得した。もっとも、王が多く言葉を用いて母親を促すので、彼女は「自分が息子を説き伏せましょう」と約束した。そこで彼女は、息子の許にかがみ込むと、残忍な僧主をあざ笑いながら、祖国の言葉で次のように話した。「息子よ、わたしを憐れんでくれ。わたしはあなたを9カ月間にわたって胎内に宿し、3年間にわたって乳を与え、育み、この年齢にまで導き、自分があなたの育ての親であることを示した。子よ、お願いです。天を、大地を、そしてそれらの中にあるものに目を注いでくれ。あなたがこれらのすべてを目にするなら、神がそれらを、既に存在したもから創ったのではないことが分かるでしょう。人類もそのようにして誕生したのです。あんな人殺しなど恐れず、むしろあなたの兄たちに劣らぬ者となって死を受け容れなさい。神の憐れみのうちに、わたしがあなたをあなたの兄たちとともに受け取ることができるように」。

「旧約聖書続編」は、カトリック系の名称では「第二正典」(仏語で deutérocanonique) と呼ばれる部分に相当します。東地中海一帯は、アレクサンドロス大王(前356-323) 治下のマケドニアによって統一されるとギリシア語圏となり、パレスティナ地方もここに含まれました。文化面でヘレニズムの影響が甚大となるこの時期以降、原典がギリシア語のユダヤ教文書が生まれます。これらが「第二正典」で、ヘブライ語(旧約) 聖書がギリシア語に訳され「七十人訳」が成立する際に、併せて「ギリシア語(旧約) 聖書」に組み込まれました。キリスト教会はこれを正典として受容し、ヒエロニムスもそれを基に「ブルガータ訳」を完成させます。なお上の一節は、律法で禁じられた豚肉を食べよう強いるシリア王アンティオコス4世(在位：前175-164) の下で、7人兄弟が次々に殉教する最後の場面です。「nōn ex hīs, quae erant, fēcīt illa Deus」は、「無からの創造」(creātiō ex nihilō) という教義の聖書典拠として著名な箇所です。

さて今回は「prōmīsīt suāsūram sē filiō」という一文に注目しましょう。ここには不定詞 esse(基本形は sum) が省略されています。suāsūram は動詞 suādēō(不定詞は suādēre「説く」; 与格 filiō を支配) の未来能動分詞・女性単数対格形で、sē とともに母親を指しています。能動態の不定法未来形としては suāsūrus esse を出すことになっています。suādēre は英語の persuade、仏語の persuader の語基となる動詞ですが、suāvis(「甘い」) という形容詞と語根を同じくしています。この語彙は、やはり「甘い」という意味のギリシア語 ἡδύς(hēdys) と同根ですが、印欧語内では氣息音(h) と s 音の交替が規則性を伴って認められます。なお北伊ヴェローナ産の白ワイン Soave は辛口のものですが、その名称は語源的にこの「甘い」suāvis に遡ります。(あきやま・まなぶ)